〔「富岡鉄斎」展によせて〕

「無量寿仏堂印譜」をめぐる鉄斎の交友について

日本近代文人画の巨匠・富岡鉄斎（1836～1924）は、その89年に及ぶ生涯の中で、京都を中心に文化人達と交流し、数多くの書画を残しました。本稿では、大正15年（1926）に発行された鉄斎の印譜「無量寿仏堂印譜」をめぐって、その交流の軌跡をご紹介したいと思います。

中国を中心に、古くから文人達は印章の収集を好み、自作や所蔵品に印を捺しました。古の文人達に強い憧れを抱いていた鉄斎も同様、篆刻に造詣が深く、現在380顆余りの蔵印が残っています。書画作品や所蔵本に捺されたもので所在不明の印も含めると、600顆以上を所有していたと考えられています。

「無量寿仏堂印譜」全5冊は、鉄斎が没して2年後の大正15年、京都の田村寸紅堂より発行された、鉄斎の愛蔵印309顆を収録する印譜です（図1。写真右が帙、左が冊子。大和文華館蔵）。限定300部、当時ではたいへんな高額の1部200円で販売されました。帙および冊子の題箋と序文は内藤湖南、表題は長尾雨山によるもので、いずれも鉄斎とその子息・謙蔵と深い親交を持った当時の漢学界の重鎮です。各印を紹介する頁は、篆刻家・河合章石の指導のもと、全ての印を一つ一つ朱肉で捺すという、非常に手間のかかったものでした。印は、中国と日本の古印、当時の著名な文人が鏤刻したもの、鉄斎の自刻印など多岐にわたり、印ごとの素材、作者、時代も明記されています（図2。図版は清末民初の羅振玉による刻印）。当時の宣伝文で「まことに和漢を通じて空前、おそらくは絶後の大譜」と称賛される通り、生前の鉄斎の深い学識と審美眼、広範な文人ネットワークがあったからこそ実現しえた印譜といえるでしょう。

内容の充実ぶりはさることながら、「無量寿仏堂印譜」は、その装丁の美しさにも眼を見張るものがあります。装丁は今日まで続く京都の表具師、岡墨光堂によってなされました。帙の裂地には、古代裂を模したという丹地色桐鳳凰丸双鹿模様の綾錦が用いられています。更に各本の装丁は、清の乾隆内府本に倣うもので、表紙には紺地に金箔が散らされています。帙、冊子ともに非常に格調高く美しい装丁で、宣伝文では「内容の貴重と装丁の善美と相俟って、文房装飾の華としても真に堂々たるもの」と絶賛され、充実した内容だけでなく、装丁の高い鑑賞性も当時非常に注目されていたことがわかります。

鉄斎と深い親交があった岡墨光堂は、7月の祇園祭にあわせて、毎年店舗にて展覧会「祇園会」を開催するなど、当時の京都における文化サロンとしての重要な役割も果たしていました。鉄斎没後の大正14年（1925）の祇園会展観目録には、鉄斎による表題「静観」二字、竹内栖鳳や橋本関雪を始めとする日本画家達の作品が録され、ネットワークの中核に鉄斎がいたことが窺えます。

今回初公開となる「扇面新居雅会図」（個人蔵）（図3）は、鉄斎と岡墨光堂の交流の中で生まれた作品です。大正8年（1919）、岡墨光堂は現在の所在地に居を移しました。鉄斎の自跋から、本図は同年9月に新店舗を祝って岡墨光堂に贈られたものとわかります。落成に際しては店内で新築披露展覧会が催されたといい、本図はそのときの模様、あるいは過去の展覧会を描いたと考えられます。

本図は紙本着色の扇面画で、画面中央には5名の男性が座し、食い入るように壁面の掛軸を見ています。軸は下部しか見えませんが、6点並んでいて、中央の軸には墨一色で庵と汀の描かれた山水景らしきモチーフが窺えます。男性たちは大きく頭をのけぞらせ、眼を丸く見開いて、作品を見ることに没頭しているようです。一方、画面右手前では、3名の男性が喫茶しながら和やかに談笑しています。鑑賞の合間に一息ついているのでしょうか。小画面ながら、まるで私達が扇面の向うに広がる展示場の様子を覗き見ているような、活き活きとした臨場感のある空間が現出されています。画面右上には、篆刻家・桑名鉄城による田能村竹田印の模刻「老画師」（朱文長円印）、画面左の尾印には、小沢蒙処の刻「百錬無僊」（白文朱文長方印）が捺されます。鉄斎による跋文は、以下になります。

「絵山水作丹青。知筒中別有天地。築巖巒帰戸牖。看者裡無限烟霞。大正八年九月祝墨光堂新居。八十又四齢鉄斎外史」（山水を描いて彩色をなせば、筒の中に別世界があることを知る。険しい山々を築き、門戸に身をゆだねると、画を鑑賞する者の内には煙霞が限りなく広がる。大正八年九月、岡墨光堂の新居を祝う。八十四歳、鉄斎外史）。この跋をふまえると、画中の人々はまさに眼前の画の中に入り、ひととき別世界に身を置いているのでしょう。岡墨光堂での風雅の会を愛した、鉄斎の温かいまなざしが伝わるようです。

「無量寿仏堂印譜」の膨大な印影を前にしたとき、私達は知の巨人・鉄斎の所業に圧倒されますが、本冊の成りたちに目を向けると、生前の鉄斎の温かい交流の跡をかいま見ることができるのです。

（都甲さやか）

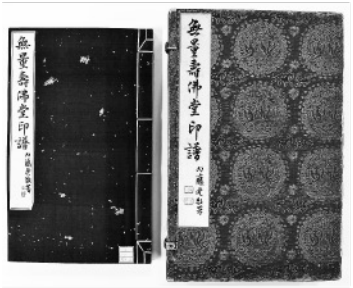

図1

図2

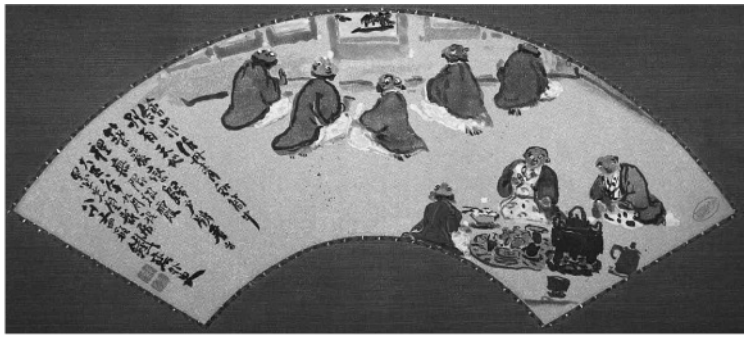

図3

季刊 美のたより No.205
平成31年 1月 5日
発行 大和文華館

Copyright ©2012 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.